（様式）

# 令和5年度　学校評価　学校関係者評価書

| 学校名 | 三木市立豊地小学校 |
|---|---|

## 1 学校教育目標

誇りをもち　こころ豊かに　たくましく　学び続ける子の育成

～　考える子　はげましあう子　つよい子　～

## 2 本年度の重点目標

①確かな学力の育成・・・基礎学力の定着。学びに向かう力、表現力、自己調整力、論理的思考力の向上。　②笑顔あふれる人間関係の構築・・・学校に誇りをもち、信頼して、安全・安心に過ごせる時間と空間の確保。

## 3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している　B：概ね達成している　C：あまり達成していない　D：達成していない 】

| 観点 | 評価項目（取組内容） | 取組（達成）の状況 | 評価 | 改善の方策 |
|---|---|---|---|---|
| 学習指導 | ○ 主体的・対話的な学びの創造<br>1 学びに向かう力や個別最適な学び・協働的な学びを意識した授業づくりを行う。<br>2 ICTを活用して個に応じた指導を行うことにより、確かな学力の育成を図る。<br>3 外国語科・外国語活動において、ALTと連携し、教材を工夫することで、児童が外国語に親しみ、意欲的に取り組む授業づくりに努める。<br>4 家庭と連携して、家庭学習の定着を図る。 | 1 児童が主体的・対話的に学べる授業づくりを目指して、全職員が1人1回の研究授業を行った。単元構想、指導計画等について事前に検討し、授業後の研修会で意見交流を行うことで、授業展開や指導方法について研修を深めた。児童がより意欲的に学ぶ課題設定の工夫や指導展開の研修を行い、児童は主体的に学びに向かう力が身についてきた。<br>2 各教科におけるめあての設定、ふりかえり、調べ学習、まとめ新聞作り、意見交流、AIドリル等、いろいろな場面でICTを活用して学習に取り組ませた。AIドリルは、各自の習熟度に応じた内容が学習でき、できなかったところを復習することもできる。そのため、基礎学力の定着が図れ、集中して学習に取り組む児童が増えた。<br>3 ALTとの打ち合わせは十分でき、スムーズな授業展開ができた。デジタル教科書を活用したり、ゲームを取り入れたりすることで、児童が英語を話すことに抵抗をもたず、楽しく学習に取り組むことができた。子どもたちは、ALTと一緒に遊んだり、話しかけたりして関わりをもつようになり、英語に親しむ姿が見られるようになった。<br>4 毎日の課題に加え、学期に2回、「家庭学習ふりかえり週間」の取組を実施し、子どもたちに家庭学習の大切さを意識づけた。「みっきいステップ」を活用することで計画的に学習する力を養った。しかし、学習時間や内容においては個人差がある。最終日には、保護者に励ましの言葉を書いていただき、学習意欲を高めることができた。 | B | 1 1人1回の公開と研究授業を継続し、教師が児童にとって「といてみたい」「考えてみたい」意欲を高める課題づくり」を常に意識して、授業研究に取り組む。単元構想、指導計画においては、グループで積極的に意見交流し、提案性のある授業づくりに取り組み、更なる授業力向上を目指す。<br>2 ICTの活用については、学年が上がるにつれて児童の操作技術もレベルアップし、プレゼン作成等、表現力も育ってきているので、さらに児童の学力を伸ばすための有効な活用を模索していく。また、ドリル学習ではAIドリルを活用し、習熟度に合わせた課題を取り入れ、必要に応じて個別指導を行い、認め励ましていく。<br>3 ALTと綿密な打ち合わせができているので、児童がより英語に親しみながら学習できる指導展開を工夫する。表現力を養うために、発音練習や会話を多く取り入れる。また、児童にとって英語が身近な言語になるように、行事等で英語に触れる機会を意図的に設定する。ALTが日本語を多用せず、英語で伝えるようにすることで英語に親しめるようにする。<br>4 児童の様子や毎日の課題の取組等、気になることがあれば家庭との連絡を密にし、児童が前向きに学習に取り組めるように支援したり、家庭での学習方法を教示したりする。また、児童にとってより効果的な取組にするため、「家庭学習ふりかえり週間」の実施時期を全教職員で検討していく。 |
| 人権・道徳教育 | ○ 人権を尊重し、よりよく生きようとする児童の育成<br>1 道徳・同和・人権に係る教科書や資料、地域教材などを有効に活用し、「対話的で深い学びをめざす」授業づくりに取り組む。また、「情報モラル」、「インターネット上の差別やいじめ」等、新たな人権課題にも取り組む。<br>2 道徳・同和・人権の授業だけではなく、全教育活動において、自他を大切にし、共に高め合う仲間づくりを推進する。<br>3 家庭・地域・学校が連携した道徳・同和・人権学習の充実に努める。 | 1 発達段階に応じて作成した年間カリキュラムをもとに、児童の実態に応じた授業を展開した。授業では、児童一人一人が自分の意見を発表する場を設けるとともに、「ふりかえり」等を書く時間を必ず設け、教師がその「ふりかえり」に励ましのコメント等を書くことで、児童の実践意欲を高めることにつなげた。また、外部人材を活用して高学年を中心に「情報モラル」に係る学習を行うとともに、家庭と連携しながら、情報機器の正しい活用の仕方等についての習慣づくりを行った。<br>2 道徳科の授業で学んだことを机上の理想論に終わらせずに、実際の生活で活かしたり、実践したりするように絶えず意識をさせてきた。そのため、学級・学年での活動はもちろん、異年齢・異学年間の活動や交流では、年上の児童がリーダーとなって、年下の児童をまとめ、主体的に活動することができた。また、4年生を中心に「人権の花」活動に取り組み、自分たちが育てた花を校区にあるデイサービスセンターに寄贈した。<br>3 1学期には、児童・保護者が「三木市差別をなくする輪を広げよう市民運動」に取り組み、ともに人権感覚を高めることができた。2学期には、親子人権学習と学級懇談会、PTA人権講演会を開き、学校と家庭が連携して、人権・同和学習に取り組んだ。親子人権学習を行うにあたっては、事前・事後に職員研修を行い、学習内容や展開の仕方はもちろん、人権・同和教育に係る本校の系統性等についても討議を行い、共通理解と見識を深めた。また、家庭には事前に授業のねらいや保護者の役割等について知らせておくことで、ほぼ全家庭の保護者による積極的な参加が見られた。 | A | 1 道徳科でのより良い「対話的で深い学び」を実現するために、引き続き教材研究・授業研究等を行いながら、指導力・実践力を高めていくとともに、児童の実態に合った魅力的な教材の開発に取り組む。また、三木中校区内の小学校や家庭と連携しながら、引き続き「情報機器活用ルール」の定着を図る。<br>2 低学年は老人クラブとの花植え、中学年は環境体験活動や福祉体験活動、高学年は口吉川小学校との交流（自然学校・修学旅行）など、授業だけではなく、学年活動や様々な学校行事を通して、仲間づくりや自己有用感を高める取組を継続する。また、教育事業「なかよし学級」に係る学習や交流を充実させながら、同和教育への理解がよりいっそう深まるように取り組む。<br>3 引き続き、学校と家庭・地域が連携しながら、「三木市差別をなくする輪を広げよう運動」や親子人権学習、PTA人権講演会等に取り組む。また、学校だよりやHP、学年通信、ICT等を活用しながら積極的に情報発信を行うことで家庭の理解と協力を得られるように努める。 |

## 4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

- 自己評価は、取り組みの中で、課題を把握、分析し、しっかり計画されている。また、改善の方策も詳細に示してあり、今後の取組に期待する。
- 教職員、児童、保護者にアンケートを取り、集計する自己評価の方法は、概ね適切であると考える。
- 複数年同様な方法で自己評価を行い、数値化されていることで経年変化の考察ができることは良いと考える。
- 評価基準が全体的に高く設定されている。評価基準がもう少し低い方が妥当な評価になると考える。
- アンケート結果の中での基準の表記と評価書の自己評価結果の表記が「A・B・C・D」と同じになっているため、混同する可能性がある。標記の工夫が必要になると考える。
- アンケート結果の中での基準の表記から評価書の自己評価結果を導き出す手順を明確にしていくことを望む。

## 5 評価の観点ごとの学校関係者評価

| 学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 |
|---|
| ○ 自己評価Bは妥当である。<br>○ 自己評価は、Aが良いと考える。<br>・ 授業参観などで児童が集中して学習に取り組む様子が見られ、日頃の学習の積み上げが伺えた。<br>・ 廊下や階段などの学習環境が整えられ、日常生活の中で自然な学びをできるようになっている。<br>・ 児童の学習意欲が、今以上に増すように、これからも授業の工夫を期待する。<br>・ 全職員の一人一回の研究授業は、ぜひ継続して頂きたい。<br>・ ICTの活用は、今後も増えていくと思われるので、必要に応じて、個別指導を行って頂きたい。<br>・ 子ども達がALTに親近感を持つことで、英語を学びたいという姿勢が見受けられる。<br>・ ALTの授業では、児童の英語の実力を考慮し、日本語も併用しながら、児童が理解できるような授業をして頂きたい。<br>・ 引き続き、家庭との連携を密にしながら、ご指導をお願いしたい。 |
| ○ 自己評価Aは妥当だと考える。<br>・ 児童の意見を発表する場を設けることは大切である。日頃の授業でも、発表する場をたくさんつくる事が、児童の成長につながると思われる。<br>・ 道徳科において「ふりかえり」とそれへの励ましのコメントを書くなどの取組を継続されている。道徳科と日常生活は別物ではあるが、道徳科の学びを日常生活に活かしていこうと意識して指導されていることは評価できる。<br>・ 外部人材を活用した「情報モラル」の学習や「情報モラル」にかかる家庭との連携は大切な取組であると考える。今後、人権教育の中で更に重要な分野になると思われるので、取組を継続されたい。<br>・ 同和教育への理解は、学年により理解する事は、なかなか難しいと思われるので、6年生くらいには、ある程度理解できているレベルになればいいのではと考える。今後も継続して、教職員全体で同和教育に取り組んで頂きたい。<br>・ 引き続き、自己肯定感を高め、自分も仲間も大切にできるよう、今後も子ども達の人権や道徳への関心を高め、理解を深める指導をお願いしたい。<br>・ 「なかよし学級」の対象児童は1名であるが、交流生が17名もおり、「なかよし学級」の中での活動が評価された結果の表れではないかと考える。これからも魅力的で充実感のある活動を工夫されたい。<br>・ PTA人権講演会は、同和問題を考えるいい機会になっていると思われる。児童に合わせた人権、同和学習になればと期待する。<br>・ 心豊かな児童を育成するために、学校だよりやHP、学年通信等で学校や児童についての情報を積極的に発信し、家庭の理解や協力が得られるように努めて頂きたい。 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 特別支援教育 | ○ 共に育ち、高め合う児童の育成<br><br>1 特別な支援を必要とする児童の実態を把握し、保護者との連携を密にしながら、SCやSSWの助言をもとに組織的な校内支援体制を確立する。<br><br>2 研修等を通して、児童一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導や必要な支援が行えるよう特別支援教育に関する理解を深める。<br><br>3 こども園や保育所、中学校等と連携し、情報収集に努め、適切な支援方法を検討する。<br><br>4 個別の教育支援計画・個別の指導計画の充実を図り、教育センターや医療機関などの関係機関と連携する。 | 1 毎月、子ども委員会を開催し、児童の実態把握を行い、職員会議等で全職員で共通理解を図った。また、ケース会議を行い、支援方法・支援体制について検討した。そのため、児童の細かな変化にも対応することができ、職員間だけでなく教育センターや関係機関との連携もスムーズに図れた。SCやSSWとも連携を図り、児童に対する支援方法のアドバイスを受けた。<br><br>2 SSWやSCを講師として招聘し、その役割やケース会議の進め方について、保護者支援の方法などの研修を深めた。また、通級指導や福祉事業所についての理解を深めるための研修を行った。<br><br>3 就学予定の園児がいるこども園と連絡をとり、様子の聞き取りをしたり園に出向いて行動観察をしたりするなど情報収集に努めた。三木特別支援学校コーディネーターと連携し、特別支援学級入級を希望している児童の学校体験を数回実施した。配慮を要する児童については、個別の教育支援計画・指導計画を活用し、有効な支援方法等を中学校に引き継ぐ。<br><br>4 個別の教育支援計画・指導計画を作成し学期ごとに支援の見直し等を行い、全教職員で共通理解することで、同じ視点で指導・支援を行うことができた。通常学級の児童においても、個別の教育支援計画・指導計画を活用して引き継ぎを行い、中学校でも支援が継続されるようにする予定である。 | A | 1 今後も小規模校のメリットを生かし、全職員による多面的な実態把握をもとに目標を共通理解して支援を行う。また、気になる事案があれば、ケース会議を開き、支援方法等について検討し、必要に応じて関係機関に児童の行動観察・発達相談を依頼する。<br><br>2 スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも情報共有し、助言をしていただくとともに特別支援教育を専門とする講師を招聘し、今求められるテーマやスキルについての研修を積む。<br><br>3 就学予定の園児がいるこども園と連携し、聞き取りや行動観察等による情報収集に努め,次年度に引き継ぐ。個別の教育支援計画・指導計画、小中連携シート等を活用し、中学校への引継ぎを行う。<br><br>4 特別支援教育コーディネーターを中心に支援を要する児童やその保護者と連絡・連携を密にし、教育センターや医療機関など、関係機関と連携した組織的な関わりを継続して行う。保護者とともに児童の将来の姿と、その姿に向けた今の目標を設定し、個別の教育支援計画・指導計画を作成して、よりよい指導・支援を目指す。新たに設置される特別支援学級について、全校生に向けて啓発を行い、理解を深め、児童が互いに認め合える関係を構築していけるようにする。 | ○ 自己評価Aは妥当だと考える。<br><br>・ 豊地小学校は、小規模であるため、児童の把握はよりできる環境にあると思われる。このメリットを生かし、今後も児童の実態把握に努め、校内支援体制を充実させてもらいたい。<br>・ 教員だけでなく、SSWやSCを交えた情報交換の場を設定されていることは評価できる。また、関係機関や就学前児の在籍する園・所との連携をされていることは、児童一人一人に適切な配慮を行うことにつながっていると考える。<br>・ 子ども園や保育園、中学校と連携し、これからも研修を重ねることで、引き続き適切な支援をお願いしたい。<br>・ 個別の教育支援計画・指導計画を作成されることでより、児童に寄り添った指導を行う事ができていると考える。今後も児童に寄り添い、安心して学べるようにお願いしたい。<br>・ 現在、豊地小学校には特別支援学級がない。障がいを持つ児童等に日常的に触れ合う機会がないため、障がい者に対する理解教育の充実をお願いしたい。 |
| 生徒指導 | ○ 人間的なふれあいを核とした児童の育成<br><br>1 豊地っ子の三指標（挨拶・美化・時間）の習慣化及び月別生活目標の具現化により、基本的な生活習慣の定着を図るとともに、正しい言葉づかいや人とのかかわり方ができるようにする。<br><br>2 学級活動及び異年齢集団活動、全校活動等を通して、児童の自己実現を支援し、存在感や有用感が感じられる学校づくりに努めるとともに、リーダー育成のために全職員で関わっていく。<br><br>3 不登校の未然防止・早期発見・早期対応・支援体制を確立し、全職員が共通理解を図って対応するとともに、SC・市教委・子育て支援課等との連携を継続する。<br><br>4 SNSやインターネットの正しい使い方やつき合い方ができるよう、学校・家庭・地域が連携して取り組む。 | 1 三指標のうち、「挨拶」は、計画委員が朝の挨拶運動を企画し、多くの児童が運動に参加することで習慣化している。「掃除」は、異年齢集団・縦割班である「とよちっ子班」で掃除場所を分担し、担当する場所を協力しながら非常に熱心に行うことができた。「時間」は、ノーチャイムながらも、児童は音楽や放送を聞いたり、自分で時刻を確認したりしながら、自主的に時間・時刻を守って生活することができた。<br><br>2 「とよちっ子班」での様々な行事や集会、遊び等の活動を行った。「とよちっ子班」活動では、6年生が中心となって活動内容を考えたり班をまとめたりするなど、一人一人がリーダー性を発揮することができた。また、高学年は低学年の手助けやアドバイスをすることで自己有用感が高まり、低学年は高学年を手本として見ることで、将来のリーダーとして成長していくなど、「とよちっ子班」による活動が大いに子ども達の社会性を育むことにつながっている。<br><br>3 学期ごとに「学校生活アンケート」を実施し、児童の実態を把握したり問題の早期発見等に努めたりするとともに、子ども委員会や職員会議の中で、定期的に要支援児童や気になる児童の様子等について情報交換と共通理解を図った。また、子ども委員会にSCが参加することで専門的な視点からのアドバイスを受けることができ、必要に応じて関係機関との連携を図ることができた。このように、問題や課題に対しては学校全体で組織的に対応する体制が構築できている。さらに職員研修では、自校の「学校いじめ防止の基本方針」を確認・検討したり、「NO！体罰」を活用したりすることで、いじめや体罰、不登校の無い学校づくりに一丸となって取り組んだ。<br><br>4 児童のICT機器等の活用状況やゲームをしたり動画を見たりする時間等についての実態を調査するために「情報に係るアンケート」を実施した。その結果を分析し、課題等を整理した上で、家庭へお知らせプリントを配布し、親子で家庭でのルールづくりについて話し合ってもらった。また「情報機器活用ルール」を長期休み等に実施し、学校と家庭が連携して取り組むことにより、児童が規則正しい生活習慣を身につけることやICT機器を正しく活用すること等についての啓発が進んだ。 | B | 1 朝の挨拶は、教職員など、よく知った相手に対してやや形式的に行うようになっている。初めて出会う来校者や地域の方々などに対しても同様に、臨機応変に挨拶をし、特に場に応じた丁寧な言葉遣いができるよう、道徳の授業や学級活動、交流活動、児童会活動とも関連させながら、引き続き指導を行っていく。<br><br>2 今後も「とよちっ子班」の活動を中心に、児童が主体的に活動に取り組むことができるよう、教師がアドバイスやサポートをしていく。<br><br>3 今後も学期毎に「学校生活アンケート」を実施し、児童の実態把握と不登校の未然防止、問題の早期発見・早期対応に努める。また、問題が発生した場合には、全職員が共通理解を図って対応するとともに、必要に応じて関係者や関係機関とも連携をとりながら対応する。<br><br>4 長期休み等、必要な時期に「情報機器活用ルール」の実施を行い、メディアとの付き合い方を見直す。また「学校生活アンケート」と同様に、ICTに係る調査も毎学期行うようにする。調査によって得られた結果から児童の実態を把握し、課題等について分析するとともに、通信等を通じて家庭にも伝え、「ICT機器の適切な使い方」や「規則正しい生活習慣を身につけること」等についての啓発を行う。また、家庭でのルールがきちんと守れているかについて学校でチェックを行うなど、学校と家庭が連携しながら取り組む。 | ○ 自己評価Bは妥当である。<br>○ 自己評価は、Aが良いと考える。<br><br>・ 挨拶は、人間関係をつくる基本中の基本である。よく知っている人には、挨拶できるが、知らない人には挨拶ができない児童もいるようなので、しっかり挨拶できるよう、今後も指導してもらいたい。<br>・ とよちっ子班では、異学年が様々な活動を通じ、自主性や社会性が育まれている。今後も引き続き、指導やサポートをお願いしたい。<br>・ 学校での様子を伺うと問題行動は皆無に近いようであり、子どもたちが落ち着いて学習や行事に取り組めていると思う。ただ、今は見られないような問題行動や非常事態を想定し、学校全体で取り組める体制を整備しておかれることを願う。<br>・ 引き続き、いじめや不登校の未然防止、早期発見・対応をお願いしたい。<br>・ アンケートでもあるように、ゲームや動画の時間制限は、今後の大きな課題である。SNSやインターネット等でのトラブル回避のため、家庭と連携した指導をお願いしたい。また、「ゲーム、SNS、動画」は、時間を決めて計画的に使用できれば、規則正しい生活ができるのではないかと思う。<br>・ 家庭と学校が協力し、情報機器の正しい使い方や情報モラルが身につくよう、引き続き取り組んで頂きたい。<br>・ アンケート結果の低い項目がこの生徒指導の分野にやや多かったために自己評価結果が「B」になったと思われる。しかしながら、結果の低かった項目を見ると、「子どもは、家ではゲームやインターネットの時間やルールを守っている。」など、学校よりも家庭での生活について低くなっている。学校での指導は大切だが、それ以上に家庭での影響が大きい分野である。それによって「学校」の自己評価結果が低くなるのは不自然に思う。そのため、自己評価結果はAで良いと考える。 |
| 家庭・地域との連携 | ○ 安全・安心で、信頼される開かれた学校づくり<br><br>1 地域や保護者に学校行事や授業内容を公開するとともに、地域行事への積極的な参加を促す。<br><br>2 地域人材・地域資料等の活用を通して、家庭や地域とのつながりを大切にした、特色ある教育活動を展開する。<br><br>3 「学校だより」を地域に配布して教育活動を周知していくとともに、学校での様子等をHPで随時発信したり、各学年通信にて伝えたりする。<br><br>4 安全点検や避難訓練、防犯・防災学習を実施し、安全教育・防災教育を推進する。<br><br>5 中学校区内の学校・園との連携を推進する。 | 1 運動会・学習発表会・マラソン大会・参観日などの行事を積極的に実施し、児童や保護者から高評価であった。運動会においては就学前児の競技の実施をした。学習発表会では、合奏・合唱をプログラムの中に取り入れ実施した。<br><br>2 老人クラブの花植え、増田ふるさと公園での環境体験学習など、地域とのつながりを重視した授業を実施した。各学年ともゲストティーチャーを招聘し、プロに学ぶ授業を展開できた。その結果、児童は専門的な知識を得る機会を経て、より地域に親しみをもつようになった。夏祭りなど地域の行事に関しても積極的に参加する児童が見受けられた。<br><br>3 行事や児童会活動、日ごろの授業の様子など、学校HPで随時発信できた。定期的に保護者へHP閲覧のお知らせを文書で配布したり、学年通信で掲載があることを知らせたりして、閲覧数が伸びた。各学年からも毎月末に1か月の児童の様子をまとめて発信し、どの学年の様子も知らせることができた。<br><br>4 地域防災訓練としてEarth隊員による防災授業、消防署隊員による防災体験学習、避難所開設訓練、引き渡し訓練などを実施することができた。児童や保護者、教職員の安全への意識が向上し、危機回避能力を高めることができた。また、月に1回の校内の安全点検や遊具点検を行い、安全な学校環境づくりに努めた。<br><br>5 大規模校に進学する中で、不安を取り除くために小小交流（今年度は平田小・三樹小・口吉川小）を行った。児童は人数が多い小学校に行っても積極的に話かけることができた。 | A | 1 行事ごとに反省を出し合い、課題を洗い出した。改善すべき点を確実に引き継ぎ、来年度は今年度以上の充実した内容で実施する。運動会においては、地域競技の復活を目指す。また、タブレット端末を活用した授業に取り組み、日ごろの授業の様子を家庭に伝えられるような単元活動を実施する。<br><br>2 次年度以降に実施できるように人材一覧を取りまとめて残す。新しく開発した地域人材・資料もあったため、必要に応じて新たな人材・資料を探していきたい。<br><br>3 今後もより一層、効果的に「すぐーる」が活用できるよう、学校と地域が連携しながら、活用方法について工夫をしていく。また、今年度に続き、HPで授業内容を発信していくとともに、地域行事への積極的な参加を呼びかけていく。<br><br>4 月に1回の校内安全点検を引き続き継続して実施し、校内の安全に努める。また、避難訓練を学期に1度実施し、児童への防災教育を継続して行うとともに、警察と連携した防犯訓練等の職員研修を行い、防災・防犯への意識向上に努める。さらに、近年増加しているゲリラ豪雨等の訓練も実施することで安全意識や危機回避能力を高める。<br><br>5 口吉川小学校とは自然学校、修学旅行を一緒に行き、交流はできている。今年度も交流校を増やして小小交流を実施した。よりいっそう中学進学への不安をなくすために、学期に1回程度は中学校区の小学校（三樹小・平田小・口吉川小）と交流を行う。 | ○ 自己評価Aは妥当だと考える。<br><br>・ 運動会・学習発表会・マラソン大会・参観日などの行事を積極的に実施されており、このまま継続してもらいたい。<br>・ 運動会やオープンスクールなど保護者の参観のある行事等を積極的に実施されていることは素晴らしい。また、保護者の積極的な参加も見られる。学級懇談の出席率もかなり高いのではないかと思われる。これは、学校と保護者の信頼関係ができている証拠ではないかと考える。<br>・ 日頃の授業の様子を家庭に伝えられるような単元活動をもっと増やしてもらいたい。<br>・ 地域の行事にも児童が積極的に参加しており、学校も協力的である。地域と学校とのつながりは深いと考える。<br>・ 今年、能登の地震もあり、学校にて地域防災訓練を実施されたことは大変有意義であったと考える。細川町は谷間に居住者が多く、水害に対して不安な面がある。そのため、来年度以降も充実した防災訓練の取組の継続を願う。<br>・ 避難訓練、防犯、防災訓練、地域とのつながりを重視した授業は重要であり、今後も、継続的に実施してもらいたい。<br>・ 地区水泳については、0.1％でも溺水の可能性があるのなら、「無くす」ということも視野に、今後検討してはどうかと考える。<br>・ 三木中校区内、小・小交流に三木小を追加する。中学校への進学の不安を取り除けるよう、引き続き校区の他の小学校との交流をお願いしたい。 |